筑豊一代

王塚　跣

朝日新聞社

王塚　跣（おおつか・せん）——
本名は大塚正。大正六年、福岡県生れ。昭和十三年、下関重砲連隊に入隊し、十六年から終戦まで、南西諸島に勤務。二十一年、八幡製鉄労働課に入職して、現在に至る。九州作家同人。「海の疑惑」「機械の中で」などの作品を発表している。

筑豊一代

定価　四百五十円
昭和四十一年九月三十日第一刷発行
昭和四十一年十月二十日第三刷発行
著者　王塚　跣
発行者　朝日新聞社　足田輝一
印刷所　図書印刷株式会社
発行所　東京　大阪　北九州　名古屋　朝日新聞社

©一九六六年　王塚　跣

推薦のことば

松本　清張

東京在住の作家が、九州を書くとヘンな観察や、奇体な方言が出てくる。どんなにそれが「調べた」小説であろうと、その不自然な部分だけで、いっぺんにリアリティが失われ興味索然となる。

その点、著者は九州に住み、この小説の舞台である筑豊炭坑地帯は隅から隅まで知り尽している。よその人が他人の話を又聞きして書いたのではないから、溢れるような迫真力がある。炭坑の納屋制度は特殊な世界で、官憲の干渉も排除する一種の治外法権地帯だ。したがって、常識の理解を超えた習俗もある。それだけ裸の人間群像を見ることができる。そこに人間本来の姿のままの劇が構成されている。

著者は以前から「九州作家」の同人としてその筆力に定評があった。今回、この稿に眼を通してみて、著者の人間を見る観察力の正確と、描写力の卓抜さに感心した。二人の人間がいれば、ドラマは自然に出来るという意味のことをS・モームは言ったが、それには的確な性格把握と、興味ある背景が設定されていなければならない。著者はその点を十分に心得ている。しかも、この小説には人間は二人どころでなく、数々の男女が、いわば人間の極限状況の中に動き回っているのである。

最近、高踏的を装って、退屈で無価値な小説が多い中で、この作品は小説の真の面白さを持つものとして推したい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

筑豊一代　目次

推薦のことば・松本清張　一

遠賀土手　七
地底の呼び声　一七
巣立ち　二七
明日ない男たち　四四
袋小路　五九
リンチ　七〇
真相　八一
憤怒　九二
復讐　一〇四
病めるボタ山　一一六
再会　一二八
追われる者　一三三
焦躁　一四五
縁起と禁忌　一五七
虎穴　一六六
募集屋　一七五
地底の輓馬　一八六

きずな　一九九
激昂　二一〇
大納屋解体　二二三
太古の植物群　二三八
尾花の墓地　二五二
救出　二六一
賭　二七六
遠い足音　二九二
罠　三〇〇
旅路の果てに　三二五
昔を今に　三三四
暁暗　三四三
勝負　三五六
友情　三六七
黒い嵐　三八〇
終焉　三九二
あとがき　三九九

遠賀土手

昭和三十八年春――。

彼岸の声をきいて四、五日になるが、遠賀川原をわたる風はまだうそ寒い。

水涸れのひろびろとした川原には、野焼きの痕がくろく地図をえがきだしているだけで、まだ萠えでるもののきざしをとらえることができない。いや、仔細にうかがえば、琥珀色の肌をした土筆ぐらいは頭をもたげているかもしれない。やぶれモンペをはいた老婆が二人、這いつくばるようにして土手の斜面になにかをあさっている。子供たちが棒切をふりまわして、黒い焼痕をかけまわっている。

川原の片隅に帯のようにすねた水は、黒く澱んで、ときおり、神経質なちりめん皺を、水際の黒い砂にはしらせている。ここでは川砂でさえ黒い。

下田伝吉はながいこと、土手道にたたずんでいたが、やがてゆっくりした足どりで川上の方に向って歩きだした。

その眼はふかい皺のなかにどんより濁っているが、光のかげんか、ときおりするどいものを宿すこともあったし、その皮膚はながい間地底で炭塵を吸い続けてきたせいか、象皮のようにあおぐろい。

伝吉は黒い流れの方をふりかえってから、土手を右に折れ、田圃の畦道を山手に向って歩きだした。

行手には、はげかかった丘陵地帯が続き、名物のピラミッド型のボタ山が、そこここに重なり合っている。その中にある一群のボタ山の黒い肌を這うように白い煙がもつれている。

――あいつも、ながいこと燃え続けたもんよなあ。伝吉は遠くをのぞむような眼つきをして呟いた。この附近でどうにか出炭を維持しているのはあのヤマぐらいなもんじゃが、と、伝吉は考える。あの火と、筑豊のヤマの寿命とはどっちがながかろう。

燃えるボタ山というのは遠賀川の下流に近い鞍手のヤマ(炭鉱)にある。ボタに混ってすてられた石炭に火が入って、もう幾十年も燃え続けている。筑豊線の列車の窓からその白い煙をのぞむことができるし、また、夜になると、千灯会か、きつね火のように山肌にちろちろする火影をみることができる。

下田伝吉は、その一生の殆どを遠賀川筋のヤマで過してきた。遠賀の黒い流れと、空をきる鋭いボタ山とが彼のふるさとだった。

若い頃、一時この川筋を追われて他郷の地底で働いたこともあったが、やはり、この川とボタ山とに吸いよせられるように筑豊に舞いもどってきた。

川筋のあばれ者として、中、小のヤマに名を売ったこともある。腕のいい先山(掘進夫の長)として後向連中(先山の部下)から尊敬されたこともあるし、その手腕を買われて鉱長として小ヤマを託された一時期もあった。が、すべては、一朝の夢にしかすぎなかった。

ボタ山は急速に荒れはじめ、遠賀土手は日毎に生彩を失ってきた。彼が現在住んでいる炭住長屋

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

も、ヤマが閉山になると前後して、周囲の人たちはつぎつぎと離散していった。屋根の波打ったハーモニカ長屋は、落ちた壁とくさった根太だけの残骸となり、その背後にそびえる二つのボタ山も、雨に洗われ老残の深い皺がきざまれ、美しかった稜線はみるかげもないものに変ってしまった。

遠賀土手行きゃ……。炭粉まじりのだらだら道の上から、低いだみ声の唄がきこえてきた。いや、唄というより、怒鳴り声にちかい。

――ふん、源……、源の声じゃが。伝吉は足をとめて眉根をよせた。気のせいかもしれない。源の行方不明が伝えられてから、もう三ヵ月にもなるはずだ。伝吉は坂の上の方を見上げて、せかせかした足どりになった。

道といっても、もう廃道に近い。ほんの二、三年前までは炭塵を捲きあげていせいよくトラックや三輪車が上り下りしていたものだが、いまは雨水にえぐられた道は、川底のように小石をむきだしている。

「やっぱり、源か。いつ戻ってきたとか？」

伝吉は足をとめて男の顔を見上げた。相手は先刻から伝吉に気づいていたらしく、坂の中途に足をとめて、にやにや笑っている。四十がらみの男で、いいみなりはしてない。穿いている地下タビにも穴があいている。

「爺さん、なにかよかことなかろうか？」

機先を制するように相手が云う。

「いいことちゅうて、お前……」
伝吉は少しむっとした顔をして、
「いま、どこで働いとるとか？」
と、男の首に捲いているあかじみた手拭に眼をやる。
「どこのヤマも、よかとこはないばい」
と、伝吉の横をするりとぬけて坂を下っていこうとする。
「源っ。お前、また行くとか？」
「おらあ、此処のもんじゃねえとばい、爺さん」
「なら、止めやせん。止めやせんけが、その借りもんの炭坑節だきゃやめてくれよ。本当のヤマ男はな、そげな唄はうたわんぞ」
「おれあ、ヤマ男に、みきりをつけたもんな」
男は振りむきもしない。男ののこした安焼酎の臭いだけが、伝吉の身辺にまといついて離れない。
「源のやつも……」
伝吉は舌打ちしながら、捲き場の方を見上げた。右手の小高い藪の中に錆びついた捲上機の残骸が枯木のようにとげとげしくのぞいている。彼等はそれを、百貫捲きと、昔ながらの呼名で親しんできた。ヤマに育った者には、捲上機は忘れることのできない存在だ。それは、昔の蒸気捲きが今の電気捲きに変っても同じこと。捲き場の滑車はヤマのいのちだ。これがいせいよく回っているあいだ、ヤ

マには飢餓はない。しかし、伝吉たちのヤマの捲き場はもうくちはててしまった。

伝吉は気むずかしい顔をして歩きだした。川筋を下ってくるらしい石炭列車の音が近づいてくる。

「源のやつまでが……」

伝吉は信じかねる気持であった。

三ヵ月ほど前、ひどく寒い夜、源の女房が伝吉の家にやってきて、父うちゃんがもう三日ほど帰ってこぬと云う。わけをきいてみると、夫婦げんかの挙句のはてのことらしい。配給米も満足に買えぬくらしに、毎晩の焼酎はちとぜいたくじゃなかなと云ったことが原因だという。この程度のことなら、しょっちゅう女房も云っていたが、その日は源の虫のいどころが悪かったとみえて、いきなり女房をなぐりつけた。おれの稼いだ金でおれが飲むのが何でわりい。こぶしの後から言葉がついてきた。女房もおとなしい方じゃない。相応の逆襲はこころみたが、相手は力自慢の源、結局は足腰たたぬくらい痛めつけられてしまった。それっきり、源は帰ってこぬという。

それまで源は、町の緊急失対事業に働きに出ていた。日給は六百円、子供が二人いるから楽ではない。源がいなくなると、早速その日からのくらしに困る。

伝吉は、源の女房を連れて町の民生委員のところにでかけて生活保護の手続きをしてやった。

「一人当二千円としてもよ、三人家族じゃ六千円じゃなかな。父うちゃんに働いてもらうよか、よっぽどまし。焼酎代のいらんとじゃけんな」

そのとき、源の女房がそう云ってよろこんだのを伝吉は憶えている。

伝吉は腑におちない気持だった。その源が焼酎の臭いをふりまきながらうろうろしている。女房に逢いたくなったのか、それとも、どっかでいい仕事にありついて家族を連れにきたのか。それならいい。が、どうもそうじゃなさそうだ。

伝吉は何かを思いついたように、源の女房の住んでいる長屋の方へ足をむけた。

「源が、もどってきたじゃろ」

開けっ放しの入口から声をかけた。

源の女房は薄暗い上り框に腰をおろして、口をもぐもぐやっていたが、伝吉の声に慌てて手の甲で口端を拭いた。まだカンテラを入れるほど暗くはない。電灯料の未納からこの長屋はとうに送電をとめられている。

「知らん、しらん。逃げた亭主に用はなか」

「それでもおまえ、わしはいまそこで源に逢うたぞ」

それには返事をしない。その代り、女房の顔がにやりとくずれる。ほの暗いなかに浮んだその笑顔には何かが尾を曳いている。

「源は、いまどこで働いとるんか？」

「ふん、あんた、何時から民生委員にならしたとな？」

源の女房がむっとしたように立ち上った。

「なにもそんな顔をせんでもよか。わしは調べにきたんじゃなかぞ。ただ、あんまり人眼につかんご

とした方がいいから注意したまでのことよ」
「わかれた亭主がどこでうろうろしようと、こっちが知るもんか。それで生活保護がさしとめられるもんなら、母子三人、役場の入口で首吊ってやる」
「わかった、わかった。そう気をまわさんでもよか。かあちゃんに逢いたくないでも、子供にゃ逢いたいもんよなあ」
伝吉がなだめているところへ、足音をぬすむようにして、その横をすりぬけた小さな影が二つ、女房の横に並んだ。それぞれ買物篭みたいなものをぶらさげている。
「坊主たち、どこへ行っとった」
伝吉の云うのには応えず、小学三年ぐらいの小さい方が、
「父うちゃん、もう帰ったと？」
女房はいきり、その小さな頬をピシャリとなぐりつけ、
「子供はあっちに行っとけっ」
と、伝吉ににやりと笑いかけた。伝吉も笑って頷きかえした。
子供たちは黙って、土間の片隅にある石炭箱のなかに、さげて帰った籠の中のものをあけている。
「どれどれ、いい石炭やな」
伝吉は箱の中のものをのぞきこんで云った。粒のそろった中塊炭だ。ボタ山とか駅の構内とかで拾ってきたものとはたしかに違う。これは石炭貨車のなかにしかないものだ。

子供たちは、伝吉の言葉に警戒的な眼をして顔を見合わせている。よほど駈けてきたとみえて、その小さな肩が大きく波打っている。

しかし、伝吉はもう何も云わなかった。いや、云えなかった。何もかも狂うてしもうた。ただそう思っただけだった。

炭鉱で栄えたこの町が、炭鉱と運命をともにするのは当然である。今では、生活保護世帯が全戸数の四割もある。休山になっても、大手筋だったら配転ということもある。退職金で急場はしのげよう。だが、中、小のヤマではそうはいかない。日頃から賃金がやすいうえに、退職金ももらえないところが多い。その日から生活保護をうけなければやっていけない。

源の女房のうけとる生活保護は月額六千円である。彼女はいま、遠賀川原にある沈澱炭の採取場で働いている。日給は二百円だ。もちろん、働いていることがわかれば、その分だけ生活保護費は減額される。

源がどこで働いているかしらぬが、つぶしのきかぬ四十男を、そう条件のいい仕事が待っているはずがない。男一人、食って、飲んでそれでおしまいというところだろう。

夫婦別れが、生活保護を受けるための苦肉の策だと分ってみても、伝吉にはそれを追及する気はもうない。それでも、子供を盗炭にかりたてるほど、生活はくるしい。

「爺さん、さ、どうな」

源の女房が口の欠けた湯呑を伝吉にさしだした。彼はそれを口にもっていったが、一口飲んで、コ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com